第243回（1月）

「97年、石油はどう動くか」

石油公団　企画調査部長　岩間敏氏

石油は以前のような戦略商品ではなくなった。現在は先物商品取引によって市場価格が左右される。イラクは先の湾岸戦争の結果、生産量に枠を決められたが、これを破棄して増産に踏み切る決定をしようとしている。そのすべてが輸出に回されたら市場は大きく変わる。だが、短期的には18～25$／ｂで推移し、長期的には安定する。日本にとっては為替レートの影響のほうが大きい。

米国は湾岸戦争の勝利によって、イザとなれば武力で石油を確保できる自信がついたため、石油を戦略商品から外した。戦略上の意味よりも経済的な判断を重視した。経済問題とはコスト問題である。油価・備蓄・輸送コストに絞られる。そのため米国は運送コストの高い中東からの輸入を減らし、アフリカ西海岸や南米からの輸入に切り替えた。欧州も北海や北アフリカからの輸入に切り替えた。

このように市場原理が機能し始めた今、ＯＰＥＣ諸国・石油メジャーには、もはや市場を牛耳れるだけの力がない。中東の最大の顧客は日本とアジア諸国に変わった。特に中国は石油の需要量が急速に伸び、それが日本に影響を与える。我が国の石油の輸入元はＵＡＥ27％、サウジアラビア20％など今や80％を中東に頼っている。我が国に限り石油問題は中東問題と同一である。しかも、石油産出国政府の国営会社依存度が64％もあり、政治の場で取引が決まる。日本の政治カ・外交力が極めて重要だ。

供給予測、消費予測、価格予想とも、掘削技術の進歩によって様変りした。埋蔵量には①PROVED（判明している地層における確定埋蔵量）②PROBABLE（推定埋蔵量）③POSSIBLE（予想埋蔵量）④UNDISCOVERD（未発見または不確かなもの）の4つの仕分けがあり、その時の経済性と技術によって変わる。過去75年間の累積発見量は１兆７千億バーレルになる。しかも回収効率が従来の２倍にアップしたため、いつもあと40年もつという結果になるのだ。

埋蔵量の分布は、旧ソ連・シベリア―北米―アジア太平洋―中東―欧州―南米―アフリカの順となり、中東依存度は相対的に減ってきている。産出量は旧ソ連の減産が大きい。以前1200万bdあった生産が、今は700万bdに落ち込んでいる。極度の増産のために油田が荒れ、操業中止に追い込まれた。そこで不足分の輸入を始めたが、もともと良いタンカーを保有していなかったために、今回の日本海でのタンカーの事故による原油流出が起こったのである。